【用語】平塚―佐波郡境町　御役銅―農民の負担で運ぶ御用銅　平太―艜、高瀬船よりやや小型で、一〇〇～三〇〇俵積みの船　三友・一本木・石塚―埼玉県　沼上・八斗島ほか―玉村町・伊勢崎市ほか　芦尾―栃木県足尾町、上州は誤り　御断次第―指図があり次第　急度―必ず

【解説】江戸時代、利根川を中心とした舟運は、関東における河川交通の大動脈として大きな役割を果たし、諸大名の年貢米や商品荷物などを積み出すため多くの河岸が発達した。なかでも利根川と広瀬川の合流点に近い平塚河岸は、はじめ下野国足尾から銅山街道経由で搬出される幕府御用銅の積み出し河岸として成立したと思われるが、その開設年代は明らかでない。

この文書は、銅の産出が本格化してからの明暦三年（一六五七）九月、江戸の大火で焼け落ちた江戸城本丸の銅瓦御用のため、幕府の川船奉行以下の役人が利根川上流の上野・武蔵両国一〇カ村の船持に対して、二二艘の役船を差し出すことを命じたものである。後略の部分には一〇カ村一一人の名前が記されており、平塚村からは北爪甚右衛門が五艘の船を出したことがわかる。なお、元禄年間には御用銅の積み出し場所が下流の前島河岸（尾島町）へ移り、平塚は御用河岸としての公的な性格を失ったが、赤城山麓一帯や利根地方の薪炭・木材・大豆、また江戸方面から塩・茶などの商品荷物を扱ってますます発展した。